

『平成遣欧少年使節団として』

都於郡中学校 1 年 飯牟禮 泰希

今回、僕がこの事業に応募した理由は大きく2つありました。
それは、都於郡に住んでいるからには、伊東マンショについてもっと学びたいという
思いと、母の教えである「挑戦することの大切さ」を学ぶためです。

三年に一度、西都市の行うこの派遣事業は、ここ近年はイタリアでの研修でした。
しかし、今年は14年ぶりのポルトガル研修です。僕達はなんてラッキーなんだろう
と思いました。確かに、前回行われたイタリアへの研修、サンピエトロ大聖堂、ミラ
ノ大聖堂もすごく興味があります。しかし、

「長く行われていなかったポルトガル研修だ。数年ぶりだし、きっと以前いった頃と
はまた違う何かを目にできるのではないか。」

という緊張と期待といろんな思いで胸がいっぱいで、正直その責任の重さにふいに逃
げ出したくなることもありました。

でも、そんな思いはポルトガルに着いて一掃されたのです。

外国らしさを感じた最初のできごとは、空港での荷物の受け取りの時でした。輸送
にトラブルがあったようで、1時間もかかったのです。日本は時間に正確で、受け取
りに1時間もかかるなんて考えられません。

僕にとって印象的だった研修先はリスボンです。最初に向った世界遺産であるベレ
ンの塔は、「リスボンのジェロニモス修道院とベレンの塔」の構成資産として世界遺
産リストに登録されているところで、マンショ達がポルトガルに入港した場所です。



その他に、リスボン市西部
ベレン地区のテージョ川岸
にある「発見のモニュメン
ト」は大航海時代を記念し
た記念碑で、それは13階
建のビルほどの高さで、記
念碑でこれほど大きいもの
を見たのは初めてでした。
記念碑には、ポルトガルの
国に貢献した航海士たちが
東側と西側それぞれに石像

として建てられています。ヴァスコ・ダ・ガマ、フェルディナンド・マゼラン、フランシスコ・ザビエルなど、日本でも知られているような人物は全て東側にいました。次に向かったジェロニモス修道院は中に入ることができ、ヴァスコ・ダ・ガマとルイス・デ・カモンイスの棺があるため、使節団はもちろん日本から訪れる偉人たちは、必ずと言って良いほど献花しに立ち寄るそうです。外観は写真に収めることのできない程の大きさで、ただただ圧倒されました。その内観は彫刻物が見事でたくさんの石像があり、外観にも負けず劣らずといった、素晴らしい建物でした。サン・ロケ教会は 1584 年、使節団が宿泊した場所で、ここにはイエズス会の著名な 4 人の聖人像が並んでいました。使節団が宿泊した教会に立ち、使節団の偉大さを感じました。ジェロニモス修道院のように圧倒されるほどの大きさではありませんでしたが、どの建物も日本では見る事のできない彫刻物でできており、ただただ感動するばかりでした。ポルトガルは僕にとって、町全体がまるで美術館といっても過言ではないと思います。それだけ、当時の彫刻家たちの素晴らしさが、今でも息づいているというのは、本当に凄い事だと思います。シントラで見



たペーナ宮殿は、外観内観ともにさっぱりしたシントラ宮殿とは違い、色鮮やかで可愛らしい外観です。内観には時代の流れを感じる鮮やかなタイル装飾があり、この装飾は、現代に近づくにつれて青色が多く使われるようになっていていると聞きました。行く先々、ほとんどがポルトガルの歴史の話でしたが、この歴史的な場所ひとつひとつをマンショ達も訪問したそうです。もし、バテレン追放令が無く、彼らが見たものがあの頃の日本に多く伝えられていたら、マンショ達が生きた時代の日本の建物や文化は違うものになっていたのかもしれないなあと思いました。そして、私達が今生きる時代の建物や文化も違っていたのかもしれない。

ポルトガル 4 日目、ヴィラ・ヴィソーザで、「戦国の少年外交団結秘」という本を書いている、ティアゴ・サルゲイロさんにお会いし、ポルトガルでは伊東マンショがどんな存在だったのか、お話を聞くことができました。海外で一番壁を感じるのはやはり言葉の壁です。しかしマンショ達は日本からポルトガル到着までの 2 年間の航海



中に、ポルトガル語を学び、現地の人たちを驚かせたと言います。他にも着物の着方を教えたりと、日本の文化を彼らに伝えたそうです。ポルトガルの街を歩きティアゴ・サルゲイロさんの話を聞いたことで、僕は改めてマンシヨ達のキリスト教伝播の熱い思いやヨーロッパとの異文化交流などその視野の広さを感じ取ることができました。

今回の事業は、マンシヨ達の歴史を学ぶというより、彼らが訪れた場所を巡り、何を思ったのかを考えさせられる旅でした。現代はインターネットが世界中に普及し、画面を通して旅行気分が味わえます。ネットの中でなんでも知ることが出来る世の中ですが、現地に出向き、実際に見たり触れたりして直接経験することは、インターネットでは絶対に得られない感動があります。その中で僕が感じたことは、「井の中の蛙、大海を知らず」という言葉そのもので、海外には僕達の想像を超える素晴らしい世界が広がっているということでした。そして外の世界を見たことで、日本の素晴らしさを感じることもできました。

僕達の住む西都市は、伊東マンシヨ生誕の地だけでなく、西都原古墳群があります。世界中どこを探しても西都市にしかない文化があります。また、マンゴーやピーマンなど美味しい食べ物にも恵まれています。そこにある当たり前のことが、僕達、日本人の誇りでもあり宝であることを改めて感じることもできました。

最後になりますが、今回の研修の参加は、たくさんの方の協力がありました。皆さんのおかげで、ポルトガルの素晴らしさを感じることができ、日本の素晴らしさも改めて見つめ直すことができたと思っています。本当にありがとうございます。この経験を活かし、視野を広げて、僕にしかできない何かを見つけるために、今以上に勉強を頑張っていきたいと思います。



『伊東マンショの足跡をたどって』

都於郡中学校 3 年 富山 聡子

天正遣欧少年使節団の主席大使である伊東マンショが生まれた都於郡で育った私は、小さな頃から家庭や地域、学校で折に触れてマンショのことを学んできました。都於郡城跡や小・中学校には銅像や肖像画があり、たいへん身近な偉人として認識しています。

今回は平成遣欧少年使節としてポルトガルを訪問することになり、事前研修では、ポルトガル語や歴史、マンショの生い立ちや功績まで幅広く学んだり自分でも調べたりしながら、出発までの日々をワクワクしながら過ごしていました。滞在中は 4 少年ゆかりの地や世界遺産など様々な場所を訪問し、感動の連続でしたが、その中でも特に印象に残っている施設を紹介したいと思います。

大航海時代の富をつぎ込んで建築され、完成に 300 年ほどかかったとされるジェロニモス修道院は、4 少年が訪問した場所の一つです。壁や天井にたくさんの彫刻が施されていてとてもきれいでした。ポルトガルは日差しが強いのですが、日本と湿度が違い、「からっ」として涼しく、青空が澄んでいて大きな建物の白と青空とがよく似合っていました。

エヴォラ大聖堂には、1584 年に伊東マンショと千々石ミゲルが弾いたとされるパイプオルガンが残っていました。少年達の演奏はポルトガル人から大喝采を受けたそうです。420 年以上の歳月を経た今でも日曜日のミサに使われているとのことでした。今回は残念ながら見学だけでしたが、次回訪れる時には、ぜひ生でその音色を聞いてみたいという気持ちになりました。エヴォラは町全体が世界遺産に登録されていて城壁に囲まれている町です。ローマ時代からこの地方の中心として栄えた場所で、ローマ、イスラム、キリスト教それぞれの時代を物語る建造物が並んでいて、町全体がまるで美術館のようでした。また、エヴォラにはコルクの木やオリーブの木がたくさんあり、実際に半分まで剥がされているコルクの木を初



めて触ってみると、少し柔らかかったです。4少年も、このコルクの木を触れたかったのかなあと思うと感慨深くなりました。

ヴィラ・ヴィソーザにあるブラカンサ公爵館では、「戦国の少年外国団秘話」という4少年とポルトガルとの関わりについて執筆したティアゴ・サルゲイロさんと日本語に訳した田中紅子さんが出迎えてくれました。そして館内を案内しながら説明してくださいました。一般の人は入れない場所にも入れていただき、そこには、その当時の貴族が使用していた調度品や馬車などが保管されていました。また、ティアゴさんの自宅にも招待していただき、日本との生活や文化の違いを目の当たりにすることができた貴重な体験でした。

ポルトガルには親日家が多く、私たちには日本語で挨拶をしてくれてとてもうれしかったです。また、つたない英語にも親切に答えてくれました。ポルトガルは、第二次世界大戦の時、中立の立場だったため、古い建造物がたくさん残っていました。見るもの聞くものすべてが驚きの連続で、美しい景色や町並みに圧倒されっぱなしでした。高い場所から町をみおろすと、赤煉瓦があたり一面に並んでいてとてもきれいでした。4少年も同じ気持ちになったのかと勝手に想像してしまいました。

4少年の欧州訪問は、世界が日本を知り、日本が世界を知るきっかけになりました。マンショ達は私と同じくらいの年齢で旅したのですが、普段から洋食を食べることが習慣となっている私でさえ、日本とは全く違った料理や味付けになれることができませんでした。マンショ達はさぞかし驚くことが多かったのではないかと思います。そうした中でも、人々の前でポルトガル語を話したり、堂々と楽器を演奏したりしたと聞いて、改めてマンショ達の偉大さに気付かされました。

今回の派遣で、外国の事や歴史、宗教にも強く興味をもちました。今後更に勉強して、もっと詳しく知りたいです。「再びポルトガ



4少年の足跡をたどる事を目的とした平成遣欧少年使節に参加して、伊東マンショの人生を深く学ぶ事ができ、マンショが西都の偉人であることを誇りに思いました。



『天正遣欧少年使節団の足跡を訪ねて』

西都市教育委員会 田中 幸一

3年に1度実施される海外派遣事業に、伊東マンショの生誕地である都於郡地区の2名の中学生とともに、随行者として参加させていただいた。

8月1日、長崎から参加する10名の中学生と羽田空港で合流。出発式を終え、いよいよ今回の目的地ポルトガルに向けて12時間の空旅が始まった。子どもたちにカメラを向けるとピースと笑顔。研修への期待感が感じられた。機内では、勉強をしたり、映画を見たり、それぞれが思い思いの時間を過ごしていた。3回の機内食は、すべてメインがパスタ。長旅の疲れと重なり、次第に箸の動きが鈍くなる子どもたちもいた。空港での手荷物の受け取りに手間取り、首都リスボンのホテルへ到着した時には、夜中の12時半を過ぎていた。スマホには、自宅までの距離11,180kmと記されていた。

8月2日、リスボンは、突き抜ける青空。白壁にオレンジ色の屋根瓦の家々が映え、どこを眺めても絵になる風景が続いた。ゆうに30度を超える暑さなのだが、吟味して選んだ汗拭きシートを使うことはほとんどなかった。日本の気候との違いを感じなら、テージョ川の河口沿いにあるベレンの塔やジェロニモス修道院を巡った。この辺りは、ザビエルが日本に向けて出発した地であり、使節団が祝砲を受けながら到着した地でもあった。同じ場所に立つ子どもたちの姿に、2年半もの命がけの大航海を乗り越えた少年たちの姿を重ねながら思いを馳せた。少年たちが宿舎として1か月滞在したサン・ロケ教会では、天井一面に描かれた絵画や黄金色に輝く細やかな彫刻で埋め尽くされた祭壇に



圧倒された。ユーラシア大陸最西端の口力岬では、大西洋からの肌寒さを感じる風を受けながら、断崖からの雄大な眺めを子どもたちと堪能した。

8月3日、緑豊かな山間に位置するシントラ市。かつて城館であった市役所において、副市長への表敬と現地の子どもたちとの交流が行われた。誕生日を祝う歌をそれ



ぞれの国の言葉で歌いバースデーケーキを食べる場面もあり、短い時間ではあったが、和気あいあいとした雰囲気にも包まれた。中腹に 30m もの高さの白い 2 本の煙突が印象的なシントラ宮殿、山頂に建つ赤や黄色などカラフルな建物からなるペーナ宮殿は、ひととき異彩を放っており、子どもたちから感嘆の声があがった。

8月4日、リスボンからバスで約2時間、内陸部に位置するエヴォラへ移動。車窓からは、初めて目にするコルク櫟の林やブドウ畑が広がっていた。マンショらが弾いたとされるパイプオルガンのあるエヴォラ大聖堂は、城壁に囲まれたエヴォラの丘上に建っていた。大衆が注目する中で、大司教から拍手喝采を受けた彼らの演奏。自分たちの使命感をかみしめ、緊張を抑えながら堂々と弾いたのだろう。昨秋見たマンショの肖像画を思い描きながらそう思った。

8月5日、スペインとの国境に近いヴィラ・ヴィソーザにあるブラガンザ公爵館を訪ねた。広大な敷地の脇に止めたバスを降りると一段と日差しがまぶしかった。昨年の12月から雨が降っていないとのことであった。少年使節の研究者であるサルゲイロ学芸員に館内を案内していただいた。彼らが見たペルシャ絨毯や装飾タイル、高級な陶磁器や金銀をあしらった食器、車輪の直径が子どもたちの背丈を超えるほどの馬車の迫力に驚かされた。彼らは大歓迎され、庭で闘牛を見たり、1,500 ha もの狩猟場で狩りをしたりして過ごしたようである。帰国後、豊臣秀吉がアンコールしたとされる彼らの西洋楽器の演奏には、ヨーロッパの人々も大変驚いたとの記録が残っているようである。ことマンショに関しては、「リーダー的な存在であった」「贈り物

は彼に渡された」「公爵の息子に和服の着方を教えた」などのエピソードがあり、一層誇らしく感じた。

8月6日、ポルトガル第二の都市ポルトを訪ねた。ハリー・ポッターの世界を感じさせるコインブラ大学のジョアン王図書館や世界一美しいと言われている本屋、どこを見ても世界の絶景としてポストカードになりそうな歴史地区の街並み、ドン・ルイス1世橋から眺める風景に心が洗われた。

翌日、ポルトガルを後にした。台風の影響が心配されたが、到着した8月8日の東京は、忘れかけていた蒸し暑さとともに青空が広がっていた。空港での解散式を終え、貴重な体験をともにした長崎の参加者との別れを惜しんだ。

今回の研修を通して、ポルトガルの歴史を感じさせる建造物の美しさとスケールの大きさを肌で感じ、異国の地で今もなお歴史的な出来事として継承されている彼らの偉大な功績に触れることができた。

山野団長をはじめ、企画・準備をしていただいた雲仙市の方々、随行員の方々、添乗員や現地ガイドの皆様に感謝を申し上げますとともに、多くのことを学び感じた子どもたちには、郷土のこと、世界のことに目を向け、苦難を乗り越え世界への扉を切り拓いた4人のように志を高くもち、力強く歩んでほしい。

